d(K-,n)反応を用いたLambda(1405) 分光実験のための陽子検出器の 開発(2)

J-PARC E31 collaboration

榎本瞬,石橋直哉,井上謙太郎,川崎新吾,阪口篤志,吉田幸太郎,味村周平^A,野海博之^A,飯尾雅実^B, 板橋健太^B,岩崎雅彦^B,應田治彦^B,大西宏明^B,佐久間史典^B,友野大^B,塚田暁^B,山崎敏光^B,石元茂^C,岩 井正明^C,鈴木祥仁^C,関本美知子^C,豊田晃久^C,石川隆^D,佐藤将春^D,鈴木隆敏^D,施赫將^D,竜野秀行^D,橋本 直^D,早野龍五^D,藤原裕也^D,松田恭幸^E,康寛史^F,徳田真^F,福田芳之^F,佐田優太^G,永江知文^G,平岩聡彦^G, 藤岡宏之^G,福田共和^H,溝井浩^H,D.Faso^I,O.Morra^I,M.Bragadireanu^J,C.Curceanu^J,C.Guaraldo^J,M.Iliescu^J, 岡田信二^J,D.Pietreanu^J,D.Sirghi^J,F.Sirghi^J,P.Behler^K,M.Cargnelli^K,石渡智一^K,J.Marton^K, 鈴木謙^K,E.Widmann^K,J.Zmeskal^K,H.Bhang^L,S.Choi^L,H.Yim^L,P.Kienle^M,L.Busso^N,G.Beer

版大理, 阪大RCNP^A, 理研^B, KEK^C, 東大理^D, 東大教養^E, 東工大理^F, 京大理^G, 大阪電通大^H, INFN-Torino^I, INFN-LNF^J, SMI^K, ソウル国立大^L, ミュンヘンエ大^M, Torino大^N, Victoria大^O

大阪大学理学研究科

榎本 瞬



contents

1:イントロダクション

- ^(1405)
- J-PARC E31 実験
- 2:陽子検出器の開発
- 試作機の性能評価
- 実機の製作と測定
- 3:まとめと今後の計画



٨(1405)

- Λ(1405):J^P=1/2⁻,I=0,S=-1
- 3quark? 5quark?
- ・ KbarNの束縛状態?

1405MeV/c²?(1pole?) →KbarNの強い束縛状態



1420MeV/c²?(2pole?) →KbarN(1426-16i)とπ∑(1390-66i)の重ね合わせ

KbarN束縛状態について知りたい。 → KbarNの閾値以下での反応実験d(K⁻,n)を行う。 (KbarN結合を強く反映した実験)





Y*(mass)





J-PARC E31 experiment



崩壊モードの同定

• 1: $\Lambda(1405) \rightarrow \Sigma^{+}\pi^{-} \rightarrow (n\pi^{+})\pi^{-}$ $\Sigma^{-}\pi^{+} \rightarrow (n\pi^{-})\pi^{+}$

• 2: $\Lambda(1405) \rightarrow \Sigma^0 \pi^0 \rightarrow \Lambda \gamma \pi^0 \rightarrow (p\pi^-) \gamma \pi^0$ NR/ $\Sigma(1385) \rightarrow \Lambda \pi^0 \rightarrow p\pi^- \pi^0$

→陽子検出器を新たに加えることが有効である。



崩壞粒子検出器(CDS)











陽子検出器に求められる性能



ビームテスト(@J-PARCK1.8BR)





- ・ カバーする領域(35×35cm²)
- ・読み出しch数の最適化。
 →検出器配置スペースの制限
 →K-ビーム軌道上に置くためセグメント化。
 →コスト面(センサー・アンプの削減)
- ・取り付け方法の検討
 →ケーブルの取り回し(ソレノイド内の検出器との干渉)
 →MPPCの取り付けの自由度

ソレノイド上流部分 (フレーム外した状態)







	試作機	実機
形状(厚さ幅長さ)	5*5*400mm	5*10*350mm
ライトガイド	なし	あり
接着面(MPPC-検出器)	グリス	硬化樹脂



Idea(5*10*350mm³ × 35 segment)



→実機として時間分解能の再測定



実機の時間分解能測定

Sr-90線源を用いて2本の実機をクロスして時間分解能を測定

σ=203.9ps











- J-PARC E31のため陽子検出器の試作機を製作し、ビームテストにより一定の性能(光量・時間分解能σ=246ps)が得られた。
- ・ 試作機でのテストを受け、実機を製作した。
- ・ 実機を線源で時間分解能を測定。σ=204psが得られた。
- 実機の設置に向けた準備も同時に進行中である。

- 時間分解能の改善はどこから来るものか。定量的な評価を する必要がある。
- 崩壊陽子の有感領域の詳細な検討および陽子検出器の最終的な形状の決定。







Σ⁰π⁰の同定



Λπ⁰(混入率)=(Λπ検出数[領域②])/(Λπの生成数)

ソレノイド磁石中での動作確認









MPPC-電圧特性



Photon数

run779





13ch=1p.e.

40p.e~50p.e.

厚さ5mm(5*5*400mm) 1MeVのエネルギーロス →9700p.e.(EJ-230) 入射面積9/25 開口率61.5% 全反射0.3etc

陽子検出器の開発



Excitation test of Solenoid magnet

• We Install MPPC at upstream of CDC



Set up

Source:Sr-90 Detector size:5*5*400mm³+light guide MPPC:3*3mm²(pixel size:50*50µm²)





[r]



Backward Proton Chamber 1

- BPC to measure a proton trajectory in the π⁰Σ⁰ mode is necessary to determine a Λ decay point combined with z-TPC.
- Small DC is hardly installed without interference with TPC.



BPC plan



クレプシューゴルダン係数から

- $|2 0>=\sqrt{1/6\pi^{-}\Sigma^{+}} \sqrt{2/3\pi^{0}\Sigma^{0}} \sqrt{1/6\pi^{+}\Sigma^{-}}$
- $|10>=-\sqrt{1/2\pi^{-}\Sigma^{+}}$ 0 $\sqrt{1/2\pi^{+}\Sigma^{-}}$
- $|00>=\sqrt{1/2\pi^{-}\Sigma^{+}} -\sqrt{2/3\pi^{0}\Sigma^{0}} \sqrt{1/3\pi^{+}\Sigma^{-}}$
- I=1からπ⁰Σ⁰に崩壊することはない。
- $\Sigma(1385)[I=1] \rightarrow \Sigma 0\pi 0 \wedge lt \times .$

Backward Proton chamber 2

- BPC will be placed inside of TPC and upstream of the target.
- active area is 101.5*101.5mm²(cylindrical?)
- •layer:xx'yy'xx'yy'
- -All system(ASD, chamber frame) inside φ168mm
- Drift Length is 3.5mm(101.5mm/7mm=15ch,ASD is 8(128ch))

plan:Geometry(BPD_support_frame)

